鹿児島大学医学雑誌　第47巻　補冊1　99～104頁　平成7年8月
Med J Kagoshima Univ, Vol.47, Supplement 1. 99 ～ 104, August, 1995

英医ウィリアム・ウィリスと上村泉三

鮫島信一[*1]・鮫島由美子[*2]・野添良隆[*3]

[*1]鮫島小児科理事長，院長
[*2]同事務長
[*3]中央ビル野添歯科院長

A British Medical Doctor, William Willis and Dr. Senzo Kamimura

Nobuichi SAMESHIMA, M. D.[*1], Yumiko SAMESHIMA[*2],
Yoshitaka NOZOE, Ph. D, D. D. Sc.[*3]

[*1] Director & Chairman, Sameshima Pediatric Clinic, Kagoshima
[*2] Chief Manager, Sameshima Pediatric Clinic, Kagoshima
[*3] Director, Chuo-Bill. Nozoe Dental Office, Kagoshima

鹿児島大学医学部附属病院の前庭に明治初期鹿児島で英国流の近代医学教育を行った英医ウィリアム・ウィリス（以下ウィリスと略す）（1837～1894年）の頌徳記念碑がある．この碑は明治26年鹿児島在住のウィリス門下生，上村泉三，鳥丸一郎，永田利紀，東清輝，森山昌則，山元文宅の主唱により，各地で活躍中の門下生，高木兼寛，黒木元俊，加賀美光賢，池田謙斎，岩佐純，戸塚文海，実吉安純，河村豊洲，三田村忠国（他121名）等が，照国神社横城山登山道の「鶴嶺山下公園」に建立した記念碑であった．

昭和30年3月，県立鹿児島大学医学部附属病院が山下町（現・城山町）に新築され，竣工を記念して「鹿児島県立大学医学部附属病院沿革史」の編纂と，ウィリスの「頌徳記念碑」を新病院前庭に移転した．

当時の学長は福田得志先生，医学部長　町野碩夫先生，医学部附属病院長　縄田千郎先生，沿革史編纂は薬理学の小島喜久男教授が中心であった．

その後県立鹿児島大学は，昭和30年7月～33年4月にかけて，国立に移管統合され，大学附属病院は昭和49年宇宿町亀ヶ原台地（現在の鹿児島市桜ヶ丘8丁目）に移転し，医学部長佐藤八郎先生のご尽力で頌徳記念碑も同地に移った．佐藤八郎先生は昭和43年に「英医ウィリアム・ウィリス略伝」を上梓された．

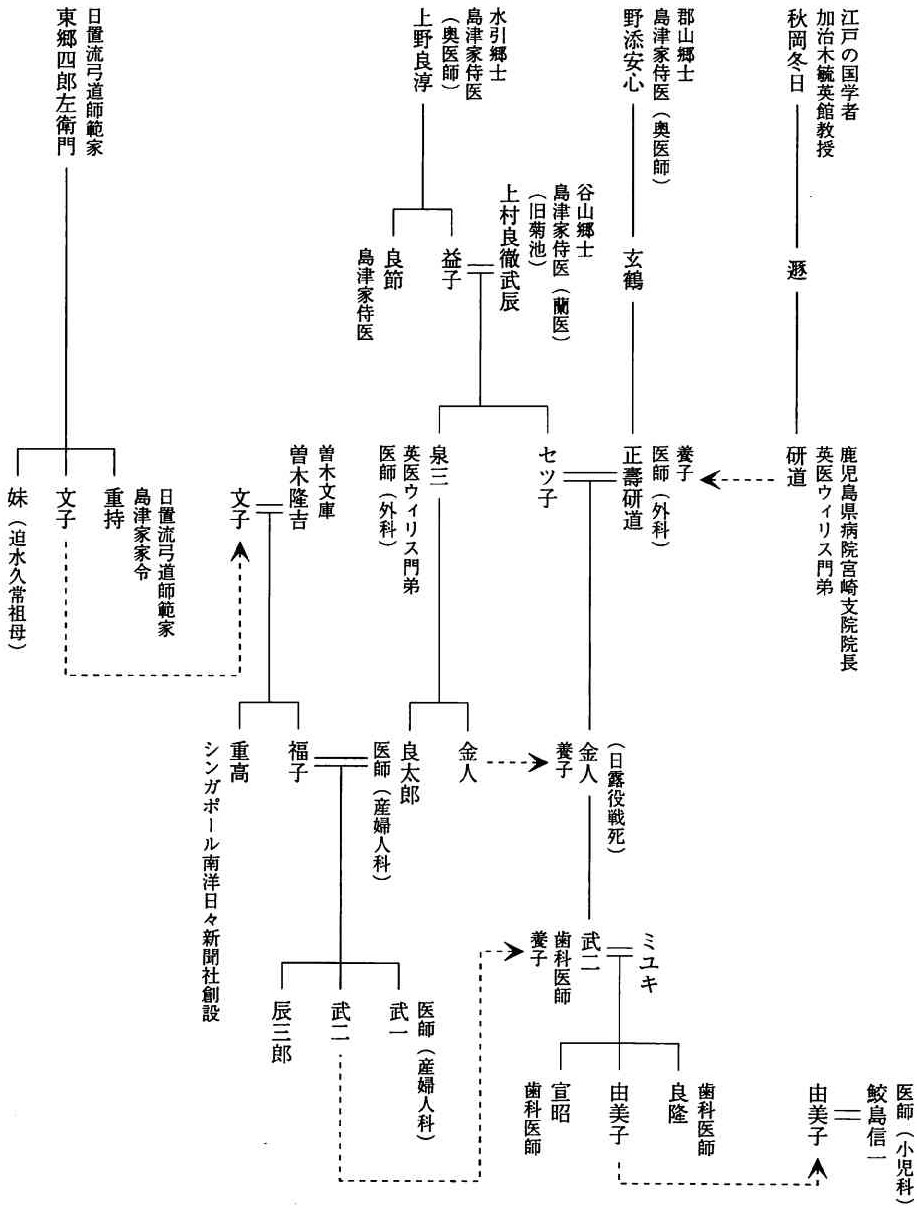
頌徳記念碑建立主唱者の一人，上村泉三は，1846年（弘化3年）島津斉興公の侍医であった上村良徹と，島津家の奥医師上野良淳（篤姫が13代将軍徳川家定へ輿入れの折りの参府御供御付医）の娘益子との間に，鹿児島市下竜尾町で上村家の長男として生まれた．同じ年に保存か撤去かで今話題の多い西田橋が肥後の名工岩永三五郎によって4連の石橋に作り替えられた．私達の父野添武二は，泉三の長男上村良太郎（1872～1957年，加治木町で産婦人科開業医）の二男で，泉三の孫であるが，ウィリスから頂いた遺品を保存している．ウィリスに関しての著述や書物は沢山あるが，ここでは上村泉三を介してみたウィリスの足跡を述べようと思う．

1．上村泉三

上村泉三の父良徹は肥後菊池の人で，来鹿の前は菊池良徹と言い長崎で蘭医学を学んでいた．江戸時代日本は鎖国であったが，長崎出島でのオランダや中国との交易は認められており，長崎はオランダ医から最新西洋医学を習得出来る唯一の場所であったので，雄藩から藩医達が派遣されていた．薩摩藩は松木雲徳をシーボルトについて勉強させていた．ところがシーボルトは，日本が国外持ち出しを禁じていた日本国の地図や江戸城の絵図面などを，ヨーロッパ行きの船に乗せていたことが発覚し，スパイ容疑で国外退去させられ，シーボルトに学んだ蘭医達はそれぞれに罰せられ，蘭学は弾圧を受けた．

その頃，薩摩藩主島津斉興公は健康がすぐれず，長崎にいた松木雲徳に往診を申しつけたが，雲徳はシーボルト事件で動きがとれず，蘭医仲間で息子の師であった「菊池良徹」に斉興公の診察を依頼した．良徹は鹿児島に下向し，奥医師上野良淳宅に逗留した．

良徹の治療で健康を回復した斉興公は，良徹を薩摩藩の侍医とし，良徹に上村（かみむら）の姓を与えた．斉興公の



野添家の家系図

侍医となった良徹は上野家の娘益子と結婚し，泉三が生まれた．泉三の父良徹は蘭医であったが，母方の祖父上野良淳（奥医師）と良淳の息子で泉三の伯父上野良節（御廣敷醫師格）は，島津家の藩医で漢方医であった．

1854年日本が開国したことにより，蘭医学のほかに西洋医学の導入も盛んになった．

泉三は蘭医学を松木弘安に，英国医学をウィリスに学んだ．松木弘安は薩摩藩医松木雲徳の養子で，蘭学に秀で，島津斉興公，島津斉彬公に仕えていた．幼名を徳太郎と云ったが松木弘庵・松木安右衛門・出水泉蔵・寺島陶蔵・寺島宗則と氏名を変えて渡欧の経験もあった．開国後は，外国官判事や神奈川知県事となり，東京と横浜間に電信線を架設し日本電気通信の父と云われ，初代駐英大使，外務卿を務め，医師としてより政治家としての名声が高かった．

2．薩英戦争

ウィリスは1837年アイルランド（現北アイルランド・ファーマナー）に生まれ，エジンバラ大学で医学を学びロンドンのミドルセックス病院勤務後，1861年（文久元年）英国公使館付医官兼書記として24才で来日，江戸の東禅寺襲撃事件に遭遇し，横浜の外人居留地へ移った．

開港したのは神奈川であったが，平地の広い隣の横浜に，英国人仏国人などが集まり，西洋人居留地を形成していた．

文久2年（1862年）8月，英国の商人リチャードソン，マーシャル，クラーク，マーガレットの4人は上海から英国へ帰国の途中，日本観光のため立ち寄り，米国大使館のある神奈川まで乗馬で遠乗りを楽しんでいた．乗馬姿の英国人達は，横浜近くの生麦で，珍しい大名行列を見つけ近づいた．外様大名ではあっても，七十七万石の薩摩藩島津家国父，島津久光公の大行列であった．日本では大名行列に出会ったら道をあけ，行列が通り過ぎるまで平伏して頭を下げ，動いてはいけなかった．（行列の通る道筋の住民達は家の中に身を隠したと云われている．）日本のルールを知らない英国商人達は，久光公の行列を乗馬姿で横切ってしまった．「無礼者！」と薩摩の武士は怒り，リチャードソンとマーシャルとクラークは，一刀のもとに切られてしまった．女性には刃を向けないのが武士の仕来たりでマーガレットは難を逃れた．彼女の知らせを受けたウィリスは，薩摩憎しと馬で救出に駆けつけたが，リチャードソンは死亡，マーシャルとクラークは負傷していた．これが後に伝えられている「生麦事件」であった．

英国側は加害者の処刑と賠償金2万5千ポンドを要求したが，薩摩は「無礼打ちは武士の特権であり，当然である」と主張して謝罪しなかった．英国側は怒り，7隻の英国艦隊を派遣，鹿児島の人々を威圧し，強引に要求を通そうとした．江戸では英艦隊の脅しが効いたが，鹿児島の人々は怯まず，交渉は決裂し，文久3年（1863年）6月28日台風の中で戦闘が始まった．（薩英戦争である）

薩摩の大砲は旧式の先込め砲で射程距離は1kmがやっとであった．英国艦隊は嵐で揺れる船上からでも撃てる，新式のアームストロング砲で飛距離も長かった．薩摩の砲台場は英艦船からの砲撃でほとんど吹き飛び，薩摩が誇った斉彬公自慢の磯の近代工場群「集成館」や，市街地の民家がアームストロング砲の直撃を受け，強風で燃え広がった．

ウィリスは軍医として従軍し英艦船におり，「町中が真っ赤に燃え上がり，台風の闇夜なのに，燃える明かりで船中を歩けた．」と日記に書いている．上村家も上野家もこの時類焼し，島津家から上村家「金拾両」，上野家「金拾五両」の類焼見舞を頂いた書き付けが残っている（野添武二蔵）．泉三はこの時18才，上村良徹と父の名を使って鹿児島で従軍していたが，家は砲火を浴びて消失し，憎い憎い英国であった．

戦争は台風最中に行われ，風雨が強く，薩摩は神風に助けられた格好であったが，英艦船の猛攻撃に合い，英国の軍事力の強さを認識し，攘夷は不可能であることを悟った．

一方英艦は戦争などする気はなく「7隻も艦船を連ねて行けば驚いて幕府と同じく英国側の要求を受け入れるだろう」と軽く考えての対戦であった．しかも戦艦パーシュース号は，桜島横山砲台場から至近距離の奇襲攻撃に合い，錨を切って逃げるという軍艦としてあってはならない屈辱的な場面もあり，双方戦争を止め，薩摩と英国は友好関係を結んだ．

和議のためウィリスは英艦船で再び鹿児島までやって来たが，薩摩の人々の「みかん」による歓待にも好意は持てず，桜島の美しさだけが心に残った．船員たちには甘みのある柔らかい「みかん」は「美味しい美味しい」と好評で，今でもタンジェリン風のみかんを英国では「サツマ」と云っていると聞いたことがある．

3．戊辰戦争

泉三とウィリスが直接出会ったのは，1868年戊辰戦争の鳥羽伏見の戦いであった．泉三は藩医として京都相国寺の薩摩藩臨時野戦病院に従軍していた．鳥羽伏見の戦いは，幕府軍1万5千人に対して，朝廷側についた薩摩長州連合軍は4千5百人で幕府軍の3分の1以下であったが，勇猛に戦い朝廷側（新政府側）の勝ち戦であった．それだけに負傷者が多く，傷が砲弾や小銃弾による銃創で，今までの漢方中心の治療では出血多量の死亡者が続出した．

大山巌は江戸の江川塾で銃術を学び，銃創の治療は英医学が進んでいる事を知っていたので，兵庫沖に停泊中の英艦隊の軍医に治療を頼みたいと考え，神戸に走り新政府の外国御用掛けに任じられたばかりの渡欧経験者，寺島陶蔵（松木弘安）と五代才助（友厚）に交渉を依頼した．

英国駐日公使パークスは人道上の立場から，病気見舞いと言うことでウィリスと通訳官アーネスト・サトウを派遣した．日本ではまだ外国人を忌み嫌い攘夷が横行していた．泉三の蘭医の師であった寺島陶蔵は，ウィリスの治療の助手と護衛を泉三に申し付けたが，快く思わぬ者どうしの出会いであった．

しかしウィリスは京都相国寺内の薩藩野戦病院に2週間滞在し，泉三や石神良策，山下弘平等薩藩の医師達を助手として負傷者の治療に当った．手術に際しては痛みを柔らげるためクロロホルムを適用するなど西洋医学の進んだ医術により，多くの負傷者を回復させた．藩主島津忠義は藩医達へ，治療法を見習うよう命じている．鎖国の日本では，外国人を毛唐といって忌み嫌い，天皇の住まわれる京都に入れなかった．ウィリスとサトウは，当時京都に入った最初の外国人であった．戊辰戦争北上につれて，新政府は横浜に軍陣病院（日本で初めての外科病院）を設立（慶応4年4月13日）し，ウィリスを医官として招聘した．ウィリスは北越の激戦地へ従軍することを申し出，助手に上村泉三を指名し，高田，柏崎，新潟，新発田，会津の野戦病院を巡回し，敵味方の区別なく治療したので，天朝病院と称された．日本の

赤十字活動は，明治10年の西南戦争時と言われているが，それよりも古い赤十字活動であった．

4．医学校兼大病院

明治2年（1869年）3月江戸は東京と改名し，明治の新政府は幕府の医学所を「医学校兼大病院」（後の東京大学医学部）とし，院長にウィリスを招聘した．

ウィリスは明治2年2月医学校兼大病院長に就任し，英国医学に基づいて設備を整え，医学生に最新の医学を教え，同時に一般患者の診療にも当たった．また病人の看護業務は当時は男性であったが，女性のほうが適していると東京大病院には女子の看護人即ち看護婦をおいた．我が国における看護婦の始まりであった．医学校は順調に軌道に乗り9ヶ月たった時，佐賀鍋島藩の蘭医相良知安が，医学取調御用掛になり，蘭書にはドイツ医学の訳書が多かったので「ドイツ医学が勝れている．日本の医学の範はドイツ医学にすべきである．」と主張し，同藩の副島種臣，大隈重信を説得し，ついに政府は「ドイツ医学を範にする」と軌道変更を決め，英国医学のウィリスは首になった．

5．鹿児島医学校兼病院長

驚いた薩摩藩の西郷と大山は，戦地で多くの負傷者を救った優秀な医師ウィリスを，鹿児島の医学校に「医学校長兼病院長」として，900弗（当時1弗1円）の日本一高い月給で招くこととした（その頃の総理大臣並みの実力者大久保利通の月給500円，泉三の月給15円であった）．

しかし鹿児島では「皇漢医道復興運動」がおき，古来の「皇朝・漢方医学」に戻そうとする者もいた．石神良策らは，西洋医学の良さを説き，認識不足を正し，ウィリスを良く知る者達を近くに置くことにし，横浜にいた泉三にも帰鹿要請をした．「これからは中央の時代だ，東京に残れ，鹿児島には帰るな」と恩師寺島は忠告してくれたが，ウィリスのことや歳老いた母を思う心が強く鹿児島へ帰った．ウィリスの鹿児島着任は明治2年12月であった．鹿児島医学校は，明治3年4月小川町に赤レンガの「赤倉病院」が建てられ，医学関係の授業はウィリスの補佐を三田村一（肇，忠国），高木藤四郎（兼寛），加賀美庄司（光寛）らがした．病院職員配置表の中に上村泉蔵（泉三）と秋岡研道（野添正壽）の名がある．

ウィリスは蒸し暑い鹿児島にはなかなか馴染めなかったが，泉三も立ち合い明治4年，江夏八重子と結婚し，明治6年アルバートが生まれ，次第に鹿児島にも慣れて楽しい生活がはじまった．鹿児島医学校在職7年の間に，英国流の近代医学教育を行い，臨床医学ばかりでなく，公衆衛生学や予防医学などと幅広く教授した．鹿児島は西日本における医学の中心となり，他県からも生徒が集まり，600人に達していたという．門下生に高木兼寛がいたが，ウィリスの勧めで英国に留学し，帰国後海軍病院長に，後に現在の東京慈恵会医科大学を創設した．日本では唯一つの英国式の医学教育機関であった．明治21年日本初の医学博士の学位記を授かった．

6．宮崎県仮病院の野添と上村

明治7年宮崎県は仮病院を開設し，ウィリスの門下生2名を招聘した．

「鹿児島県病院之医局員，1等副教長　秋岡研道，3等同上村泉三を聘し，権参事官舎を以て仮病院とし，来たる明治7年8月8日開業」と宮崎県の古文書に記されている．

秋岡研道（野添）と上村泉三の鹿児島県病院での配置は，秋岡研道「明治4年12月24日薬品部門加賀美氏の助手，明治5年2月8日医学文献邦訳，明治5年7月28日薬局長次席（15両），明治6年2月10日薬剤師」．上村泉三「明治4年7月27日外診，明治4年12月24日外診医，明治5年5月14日外診医（25両），明治6年2月10日住み込み外科医次席，明治7年12月25日外診医（15円）」であった．日向の国は明治4年（1871年）7月の廃藩置県により，延岡県，高鍋県，佐土原県，飫肥県となり，明治4年11月には美々津県と都城県に，そして明治6年1月に宮崎県と区画変更され，更に明治9年8月21日鹿児島県に併合され，現在の宮崎県の誕生は明治16年5月であった．

明治7年8月8日院長秋岡研道（野添正壽），副院長上村泉三で開業した宮崎県仮病院の名称も，「假病院」「宮嵜縣假病院」「宮崎縣病院」「旧宮崎縣假病院」「鹿児島縣病院宮崎支院」「宮崎仮病院」「鹿児島醫院分局」と文書記載名も次々と変わっている．

研道は宮崎県仮病院長の時，野添正壽と改名し，上村泉三の姉を妻にむかえたが実子に恵まれず，泉三の孫武二が家督を継承した．

明治4年英国公使官員アダムズが「ウィリス医師は鹿児島に来て以来，種痘を強制的に行っている．」と記録し，宮崎県医史には「ウィリスの門下生医師のいる仮病院（宮崎県）が種痘医師の免許を与えた．」と書かれている．ウィリ

スは種痘技術を伝授し，疱瘡の流行は激減した．全世界に猛威をふるった疱瘡は現在はその流行はなくなり，ＷＨＯの勧告で子供たちは種痘接種から開放されている．ウィリスと鹿児島醫院院長三田村一は，明治10年１月27日鹿児島を発ち宮崎仮病院に視察と指導のために出張し，１月31日より２月６日までの予定で診察していた．４日夜，鹿児島での事件勃発の知らせを受け急ぎ帰鹿（２月８日）すると，英艦でアーネスト・サトウがウィリスを迎えに来鹿していた．「西南戦争勃発」であった．

７．西南戦争後

ウィリスの門下生は西郷に従って皆従軍した．政府からは外人退去命令が出され，ウィリスは鹿児島を離れざるを得なかった．ウィリスは鹿児島を離れる時，門下生に記念の品を残した．その後，西南戦争，第２次世界大戦と戦災が鹿児島を襲い，更に，ゆかりのあった県病院や大学附属病院も，戦災，火災と二度も全焼したので，ウィリスの残した記念の品はほとんど消失してしまった，野添武二家に保存してある「医療器具」，「楕円形の西洋皿」と「コーヒー豆煎り器」が現存している数少ない貴重な記念品であろう．

ウィリスはその後シャム国バンコク駐在の英国公使館医官を勤め，1892年（明治25年）英国に帰り，1894年２月15日アイルランド（現北アイルランド・ファーマナー・エニスキレン）の兄宅で57才の生涯をとじた．

父と共に英国に渡ったアルバートは成人してオーストラリアにいたが，明治39年日本に帰り（33才），昭和16年に帰化し宇利有平と名乗ったが，昭和18年70才で他界した．

西南戦争は明治10年９月24日終結し，西郷隆盛軍の敗戦であった．従軍した医師達はそれぞれ故郷に帰ったり，知人をたよったりして全国各地に離散していった．野添正壽は，鹿児島県姶良郡加治木町で「正寿院」（外科）を開業したが，明治16年２月18日没した．上村泉三は，山ヶ野金山勤務の後，野添正壽亡き後地元民にこわれて，加治木町で「岳陽堂醫院」（外科）を開業し，大正７年（1918年）３月25日73才で没した．

８．ウィリスの残した医療器具

ウィリスが使った医療器具の中に，大きな木枠に，医療用の鋸やメスなどが入った四肢切断術に使われた医療器具があったが，伯父上村武一（産婦人科開業）が満洲・奉天（瀋陽）に残し引揚げた．父野添武二も小外科セットを譲り受け，満洲・吉林では歯科治療に使用していた．昭和12年，加治木町で開業の歯科医師中摩秀清先生から「鹿児島県歯科医師会30周年誌を編集するに際し，ウィリスから頂いた歯科医療器具を紹介したいので，貸して欲しい．」との要望があり，小外科セットの一部を送った．その後，大東亜戦争が起こって満洲には送り返されず，終戦後加治木に帰ってから返して頂いた．抜歯鉗子，ピンセット・メス・鋏・尿道カテーテル・穿刺針など26点の器具であった．

メスは柄が亀甲で装飾されており，ジャックナイフのようになっている．ピンセットの鋼は非常に軟らかく，先もずれることはない．このような鋼の弾力性は現代の技術でも再現できないそうである．穿刺針は針先以外は象牙でできており，ねじ状のキャップを被せる型で，その他のものもキャップをするようになっていることから，携帯用を考えて作られたのではないかと思われる．

西洋式歯科医療器械で伝わっているものには，シーボルトの歯科器械とウィリスのものが挙げられる．シーボルトが持参した抜歯鉗子は近代的なものであったが，直門の本間玄調がその仕用方を知らず，木槌と槽柄による抜歯を推奨した．抜歯鉗子の術式が伝わっているのはウィリスの系統だけで，上村泉三は日本における西洋式歯科手術を初めて行った先駆者といえる．

歯科外科で万能的に用いられていたのは，歯齦刀と思われる．メスは柄が亀甲製であるため，煮沸消毒はできなかったのでヨードや酒精によったものと思われる．歯科手術器の中にヘーベル（てこ）が無いことは注目を引く．クロロホルムによる全身麻酔法は行われていたが，局所麻酔法は知られていず，歯齦刀で歯ぐきを切り開き，鉗子で挟んで『エイ・ヤッ』と掛け声もろとも一気に腕力で引き抜いたのであろう．歯槽骨破折や裂傷も伴っただろうし，それ以上に患者の苦痛は想像を絶する．しかも歯を抜いた後はそのまま放置したというからいっそう残酷である．抜歯鉗子の柄には（Coking Co）と記されており，鋏や抜歯鉗子などは，現在使用されているものとほとんど同じで，これが一世紀も前のものかと，その精巧さに感嘆させられる．

おわりに

1994年（平成６年）はウィリス没後100年であり，その記念顕彰事業は，１．献花・追悼式が平成６年２月14日，頌徳碑前にて．２．記念式典及び記念講演会が平成６年４月９日，鹿児島県医師会館にて盛大に行われた．３．百年忌墓

参も9月3日より9日間の日程で企画実行され，福田健夫前医学部長が団長となり，佐藤榮一医学部長，宮田晃一郎教授，松下敏夫教授，鮫島信一等15名が参加して，ウィリス縁りの地，ロンドン，エジンバラ，ダブリン（アイルランド），ファーマナー・エニスキレン（北アイルランド）を訪問した．（鹿児島県医師会報523号　1995年1月号「ウィリアム・ウィリス縁りの地を訪ねて」鮫島信一著）

更に記念出版物を発行するので参考になる資料や原稿も頂きたいとの要望もあり，手元の資料を基に，ウィリスの足跡を書いた次第である．ご叱咤ご意見を頂ければ幸甚である．